

愛希が演じるのは、ムーラン・ルージュ新宿座のスター高輪芳子。撮影現場での実感、ドラマとエンターテインメントへの思いを語った。

——最初の「ようこそ新宿」はどんなショーナンバーですか。

クールでアダルトな雰囲気です。実際のムーラン・ルージュ新宿座ではなく待子の目に映る世界を具現化しているのも、より華やかでとてもすてき。カメラを入れることでさまざまな視点からの画が楽しめ、また照明の当たり具合も絶妙でした。私たちキャストも現場でモニターを見て感動しました。

——〈恋のかげひき〉は？

ポップでクソツツと笑えるようにと少しコミカル。リハーサルでは感覚でやってみようと思った感じで、色男の水兵さんは山崎育三郎さんにピッタリでした。エリザベートとトートの時とは全く違う雰囲気です。笑、楽しかったです。

——フィナーレ「ようこそ新宿」の撮影時のご感想は？

感慨深かったです。幻想的なシーンで、既にムーラン・ルージュ

にはいない芳子と正太郎が、待子の手をとりステージへと導くのですが、みんなに「まっちゃん！」と迎えられた琴音ちゃん（待子）が本当にうれしそうで、私までウルツときました。生バンドによる演奏も、気分を上げてくれましたね。生音は音の厚さが違い、細かい音まできちんと聞こえてきますから。物語のクライマックスにこのシーンがあるのは最高です。

——高輪芳子はどんな女性？

——戦時中の演劇、芸術の状況

REIKA MANAKI

愛希れいか



まなき・れいか 宝塚歌劇団元月組トップ娘役。
退団後は、舞台を中心に活躍。退団後の出演作に、『エリザベート』タイトルロール、『ファントム』（共に19年）、『フラッシュダンス』（20年）、『イリュージョニスト』『マタ・ハリ』『泥人魚』（全て21年）、TVドラマ『青天を衝け』（21年）など。今年10月から『エリザベート』を控える。

は今のコロナ禍とも重なりますね。はい。私もコロナ禍でエンターテインメントを続ける意味や自分たちが必要とされているのかをすごく考えてきました。しかしドラマを通して、エンターテインメントは人々に不可欠なもの、だからこそ続いてきたのだと実感しています。宝塚も苦しい戦時中を乗り越えてきた歴史があります。私もこの歴史、伝統を踏まえ、続けていけたらいいなと改めて思いました。待子のセリフ「待つてくれているファンの方たちのために舞台に立ちたい」、また支配人・千里さんの「どんな状況でも劇場を開けることに意味がある」にはすごく共感できて励まされます。

——ドラマの中でショーやミュージカルシーンがふんだんに盛り込まれることについては？

——戦時中の演劇、芸術の状況